症例

急性胆嚢炎に合併したSpontaneous Bilomaの1例

秋田労災病院外科

塚本文仁 明石建 荒川明

A Case of Spontaneous Biloma Caused by Acute Cholecystitis

Fumihito TSUKAMOTO, Tatsuru AKASHI and Akira ARAKAWA

Department of Surgery, Akita Rosai Hospital

症例は64歳、女性。右季肋部痛で発症し、胆嚢結石による急性胆嚢炎の診断で保存的治療により一旦は軽快した。半年後再び症状が出現し、肝右葉に嚢胞性病変を認め、急性胆嚢炎の再発とこの間に発生したbiloma (胆汁性嚢胞)と診断した。症状改善とともに嚢胞は縮小し、その後胆嚢摘出術を行った。胆嚢頸部に径1 cm大の結石が嵌頓しており、胆嚢底部で肝床側の壁の一部が肝内に伸展、穿破したと思われる炎症性癒痕が見られた。総胆管結石症によるspontaneous bilomaの報告は多く、そのほとんどは術前に経皮的嚢胞ドレナージが行われている。急性胆嚢炎に由来する症例は稀だが、保存的治療により胆嚢炎が軽快する場合、bilomaの自然縮小が見られ、必ずしも経皮的嚢胞ドレナージは必要ではないと考えられた。

索引用語：胆嚢結石 (gallbladder stone)、胆嚢炎 (cholecystitis)、胆汁性嚢胞 (biloma)

緒言

最近肝胆道系疾患にともなう胆汁性嚢胞 (spontaneous biloma) の報告が急増しているが、胆嚢結石を原因とする症例は稀である。また、ほとんどの症例で経皮的嚢胞ドレナージが行われている。

今回われわれは、急性胆嚢炎に合併し、経過中に自然縮小した後、胆嚢摘出術を行ったspontaneous bilomaの1例を経験したので報告する。

症例

症例：64歳、女性。

主訴：右季肋部痛。

既往歴・家族歴：特記すべきことなし。

現病歴：1998年4月頃より右季肋部痛が出現し、急性胆嚢炎と診断され保存的治療にて軽快した。発熱や黄疸はなかった。しかし、同年10月再び同

様の症状が出現したため、11月24日当院消化器科に入院した。肝右葉に嚢胞性病変を認め、胆嚢結石を伴う急性胆嚢炎とbiloma (胆汁性嚢胞)の疑いで同年12月16日当科に転科した。

入院時現症：右季肋部に軽度圧痛を認めるが腫瘤は触知しない。黄疸や発熱は認めない。

入院時検査成績 (Table 1)：末梢血検査で貧血を認め、血液生化学検査ではGOT, GPT, LAP, ALPが軽度上昇し、CRPが高値であった。

腹部超音波検査：胆嚢の腫大と壁の肥厚、その近

Table 1 Laboratory data on admission

WBC	$8190 \times 10^3 / \mu\text{l}$	LDH	167 IU/l
RBC	$338 \times 10^4 / \mu\text{l}$	Ch-E	2362 IU/l
Hb	10.8 g/dl	γ -GTP	72 IU/l
Ht	32.4 %	ALP	573 IU/l
Plt	$41.6 \times 10^4 / \mu\text{l}$	LAP	85 IU/l
GOT	49 IU/l	T.bil	0.5 mg/dl
GPT	50 IU/l	AMS	284 IU/l
CRP	14.64 mg/dl		

傍の肝右葉内に境界明瞭で均一な嚢胞性病変を認めた。

腹部CT検査：初診時（1998年4月）は胆嚢の腫大と壁の肥厚のみを認めた。肝に嚢胞性病変はなかった（Fig. 1）。二度目の症状出現時（同年10月）には、肝右葉で胆嚢に連続した8 cm大の嚢胞性病変を認め、胆嚢に接していた（Fig. 2）。当科転科時（同年12月）の腹部CT検査では嚢胞性病変は2 cm大に縮小していた（Fig. 3）。

ERCP：胆嚢頸部に陰影欠損を認め、それより末梢の胆嚢は造影されなかった（Fig. 4）。以上の所見より、胆嚢結石による胆嚢炎の経過中に発生し、保存的治療による胆嚢炎の改善とともに自然縮小をきたしたbilomaと診断した。bilomaに対しての

経皮的ドレナージの必要はなしと判断し、胆嚢摘出の目的で同年12月22日（消化器科入院後28日目）に手術を行った。

手術所見：はじめ腹腔鏡下に観察したが、胆嚢と周囲組織との癒着が高度なため開腹に移行し胆嚢摘出術を行った。胆嚢底部で肝床側の壁の一部が肝内に伸展し、この部の剥離の際、肝内に穿破したと思われる炎症性癒着が見られた。さらに肝外側ではbilomaの炎症波及による腹壁との癒着がみられた。

切除標本所見：胆嚢炎は高度で、胆嚢頸部に径1 cm大の結石が嵌頓していた。胆嚢底部で肝床側の壁の一部が肝内に穿通していた（Fig. 5）。

術後経過：経過は良好で、術後19日目に退院した。

考 察

bilomaは胆道系の破綻により胆汁が腹腔内に漏出し、限局性に被包化されて生じた胆汁性嚢胞

Fig. 1 Computed tomography performed on April 1998 showed a gallbladder swelling and its wall thickness, but there was no cystic lesion in the liver.

Fig. 2 CT performed on October 1998 showed a cystic lesion in the liver that was connected with the gallbladder.

Fig. 3 CT performed on December 1998, before operation showed a reduction of the cystic lesion.

Fig. 4 ERCP showed a defect in the gallbladder neck region. (arrow)

Fig. 5 The resected gallbladder with a stone. Its fundus wall penetrated into the liver. (arrow)

と定義される¹¹⁻³⁾が、その原因としては外傷による胆道系の損傷によるもの (traumatic)、手術や胆道ドレナージ、肝動脈塞栓術などの胆道系の損傷によるもの (iatrogenic) と肝胆道系疾患に随伴するもの (spontaneous) に大別される。画像診断の進歩により診断は容易になり、最近報告例が増加している。しかし、spontaneous bilomaの頻度は低く、さらにその多くは総胆管結石の嵌頓によるもの⁴⁾⁻⁸⁾で、多くは嚢胞の穿刺ドレナージと原疾患の外科的処置がなされている。急性胆嚢炎に伴う spontaneous bilomaの症例⁹⁾⁻¹¹⁾はさらに稀で、中でも自然消退した症例は、検索し得た範囲では1例⁹⁾のみであった。須田ら¹⁰⁾は無石胆嚢炎症例で術前に嚢胞ドレナージ造影を行い、嚢胞と胆嚢の連続性を確認している。spontaneous bilomaの成因は、胆道の機械的閉塞による胆道内圧の上昇、炎症による浸出液の貯留によると推測される¹²⁾が、本症例でも胆嚢頸部の結石の嵌頓と胆嚢炎が原因で、胆嚢外の肝内に胆嚢に連続して嚢胞性病変が形成されたものと推察される。

穿刺ドレナージは急性期に対する処置と確定診断のためにされる場合が多い。本症例では保存的治療で胆嚢炎が軽快し、それにともないbilomaも縮小したため穿刺ドレナージを行わなかったが、炎症の急性期で保存的治療に抵抗性を示す場合は、諸家の報告のごとく嚢胞のドレナージを要していたであろう。原因のはっきりしたbilomaで炎症の急性期ではなく、原疾患の治療が可能な場合は嚢胞の穿刺ドレナージをせずとも自然消退が期待されると考えられる。

結 語

急性胆嚢炎による spontaneous bilomaの自然縮小例を経験した。保存的治療により胆嚢炎が軽快する場合、bilomaの自然縮小が期待され、必ず

しも経皮的嚢胞ドレナージは必要でないと考えられた。

参考文献

- 1) 山本正之, 河野哲夫, 相野田隆雄: 胆道疾患 Biloma. 肝胆膵21: 451-454, 1990
- 2) 内野純一, 松下通明: 胆汁性嚢胞 (biloma). 日臨別冊肝・胆道系症候群: 492-495, 1996
- 3) Jorge LV, Thorsen MK, Wylie JD, et al: Evaluation and treatment of intraabdominal bilomas. AJR 144: 933-938, 1985
- 4) 吉井克己, 鈴木隆文, 落合 匠他: 総胆管結石嵌頓による胆汁性嚢胞 (Biloma) に対して内視鏡的乳頭切開切石が有効であった1例. 外科55: 1669-1674, 1993
- 5) 下田 貢, 小暮洋暉, 鈴木紀男他: 総胆管結石嵌頓に合併した胆汁性嚢胞 (biloma) の1例. 外科58: 235-239, 1996
- 6) 福 昭人, 谷村 弘, 佐々木政一他: Bilomaの2例—原因別からみた臨床経過と治療法—. 日臨外医会誌52: 1114-1119, 1991
- 7) 中島信久, 平良健康, 大峰 稔他: 総胆管結石嵌頓に併発した Bilomaの1例. 日外会誌94: 412-415, 1993
- 8) 曾川慶司, 宮崎 勝, 海保 隆他: 総胆管結石嵌頓に併発し経皮的ドレナージにより治癒した肝被膜下bilomaの1例. 日臨外医会誌57: 667-672, 1996
- 9) 大滝修司, 山川達郎, 三芳 端他: 急性胆嚢炎に併発した胆汁性仮性嚢胞の3治験例. 日消外会誌25: 1101-1104, 1992
- 10) 須田剛士, 大矢 実, 畠山重秋他: 胆嚢自然破壊による胆汁性嚢胞形成を術前に確認し得た1例. 日消病会誌88: 1375-1379, 1991
- 11) 沢田章宏, 森田 賢, 吉田祥二他: 急性胆嚢炎に伴ったbilomaの1例. 臨放線31: 1057-1060, 1986